

新 刊
紹 介

For some in ancient books
delight; Others prefer what mod-
erns write: Now I should be
extremely loth. Not to be thought
expert in both.

色川大吉・井上勝也著

『NHKこころをよむ』

——北村透谷・新島 襄——

(日本放送出版協会・発行一九九一年十二
月 B5判・二〇六頁 六七〇円)

『NHKこころをよむ』シリーズの一月放
送分として、平成四年一月五日から二十六
日の日曜日朝連続して四回NHKラジオ第
二放送で四十五分ずつ、著者自ら朗読され
たもののテキストである。井上勝也氏は同
志社大学文学部教授(西洋教育思想史)で
一九七七年より七八年まで在外研究でア
モスト・カレッジに留学され、新島襄のア
メリカにおける足跡を自分の目で確かめ、

新島が生活したその場所での生活体験を通
じて新島 の思想形成の背景を充分理解され
ている方である。一昨年『新島襄 人と思
想』(晃洋書房、一九九〇年)を著された同
志社での新島研究家のお一人でもある。

こころをよむシリーズとして取り上げら
れたものであるが、新島襄という人物の生
き方や思想を井上先生がどう紹介するかと
いうものであり、大学教授と教育学専攻と
いう専門の立場から、新島の教育観にスポ
ットがおかれたものと言えよう。

教育という視点から、新島がどの様な教
育を受けて成長したか、その時代がどの様
な時代であったか、どの様にして、支持者
と交流を創りだして行ったか、を第一章密
航―日本の近代化をめざして、第二章ニ
ーイングランド時代、第三章米欧教育思想
と新島、第四章宣教と教育と、四回分が
各々章としてまとめられてある。さらに、
関係の写真がカラーも含めて口絵写真とし
て収録されている。略年表が最後にあり、
新島と当時の日本や世界の一般事項が表に
なり、時代背景と新島の人生の経緯が分か
る。

随所に新島資料を引用しておられるが、
新島資料の出典を明らかにされているた
め、原典にも容易に接することが出来る。

新島が「公平無私になること」に努め、
自治自立の人間の育成の必要性を考えてい
たことを紹介されている。新島がどの様に
考えていたかは、彼の残したもののから我々
が想像することしか出来ない。本書を先ず
読み、いくつかの、新島の原典に触れるこ
とによって、我々教育に携わるものが自分
の教育観を創りだして行けるだろう。その
意味で、まず、新島に関心を持たせてくれ
る本である。同志社人に限る事なく教育関
係者が新島の思想と生き方を知る必読の入
門書と思う。

大鉢忠(大学工学部教授)

福本武久・高橋哲夫著

『会津武士 山本覚馬 丹羽五郎』

(歴史春秋社・発行一九九一年十一月
A5判・二七五頁 二、三〇〇円)

会津若松市にある福島県唯一の出版社・
歴史春秋社から、『会津武士』シリーズ第一
弾として、福本武久著「山本覚馬」と高橋
哲夫著「丹羽五郎」の合本が出版された。

際物だけを追って浮わっている中央の出版界に対して、それをやんわりとたしなめるような地方出版である。バブル経済に有頂天になっていた日本、湾岸戦争で悲惨な打撃を受けた婦人や子供たちを救おうともせずに、崩壊してゆくソ連を驚いて見ているだけの混沌たる現代人に、最も必要とし、また読ませたいのは、戊辰戦争前後の『会津武士道』ではないか、という企画で発行されたと言っている。

その代表たる会津武士小伝のトップが、『幕末から明治の激動期にあつて、会津魂をつらぬいて生きた先覚者・山本覚馬』（山本覚馬没後一〇〇年記念出版）であつた。

著者は、前に『会津おんな戦記』（山本覚馬の妹八重の戊辰戦記・築摩書房）や、『新島襄とその妻』（妻八重の眼から見た新島襄・新潮社）を書き、その兄の山本覚馬の生涯についても研究の深い、同志社出身の大宰治賞作家である。

さすがに期待しただけあつて、艱難辛苦、困苦勉勵のどん底から常に生れ育つていった『会津武士道』を、生涯の中に踏まえ続けた山本覚馬の人物像を見事に描き出し

ている。

それも慶応四年（明治元年）鳥羽伏見の戦いで味方の会津藩兵が敗れ去る中で、盲目の身ながら戦争の無意味さを絶叫して京都の薩摩藩牢に捕えられた覚馬が、獄中で『管見』という独自の経世論を口述筆記したが、これこそ現代から見ると当時の日本で最も秀れた革新的提言であつたと、著者は分り易く説く。

また覚馬が『管見』の背後に流れる思想に到達する過程に殆ど前半を割いている。長崎で蘭医ボードインから外国の情報を聞き、佐久間象山から「世界のかなかの日本」、勝海舟から「外国に侮られない国家づくりの実際」、西周から「法学と哲学」を学び、『管見』の中の平和・貿易・教育の三主義国家理論が成立する。

後半は『管見』の京都に於ける実践である。初めは京都府顧問、後には京都府議長や商工会議所会長として、天皇家を失つてたじろぐ京の町を、新政府のつくった東京とは異なる独自の方向で近代化政策を指導してゆく。

殊に「自由・自治・自立」精神を掲げて

同志社の創立に奔走する新島襄を助けた同志覚馬の存在意義が如何に大きいものであつたか、が具体的に巧まず描かれている。世の憂国の士、特に京都と会津の人々に一読をすすめたい。

宮崎十三八（会津史学会会長）

新潟県プロテスタント史研究会編

『明治教育秘史——新潟女学校と北越学館——』

（新潟日報事業社・発行一九九〇年五月）
B6判・三三一頁 一、五〇〇円

明治二十年から二十六年にかけて六年間、新潟には二つのキリスト教主義の学校、すなわち新潟女学校と北越学館があつた。どちらも短命に終わったけれども、新潟のキリスト者たちが中心となつて取り組み、新島襄も真剣に支援したこの教育事業のことは、これまで必ずしもその全貌が明らかにされてきたわけではなかつた。本書はこの両校の歴史にできるだけの光をあてようとする試みである。新潟県プロテスタント史研究会の皆さんの意気込みの熱気が伝わってくるような本であり、同志社史と

の関連からしても、貴重な業績であるといえる。ついでながら、私が今奉職している敬和学園は、まさしくこれら両校の精神的な後裔なのである。

岩倉にあったあの意気さかんな同志社高等商業専門学校の初代校長を一九三二年から五年間つとめた鷲尾健治先生が北越学園で学んだ人だったことは、『同志社百年史』もふれていない。今泉真幸、足利竹千代、中島末治、堀貞一といった初期の同志社卒業生がこの両校に奉職していたことは、むしろ知られている。しかし北越学園が短い期間であつたにもかかわらず、どのような有為の人材を輩出したのであつたか、本書を読むまで私は知らなかった。卒業生に関するかぎり、北越学園ははるかに強い絆を東北学院との間にもっている。卒業生の一入、東北学院の出村悌三郎院長がその顕著な例である。

内村鑑三が新島らの推薦によつて北越学園の初代教頭（実質上の校長）となり、たちまち学園の宣教師や理事者と大喧嘩をして、学園を混乱に陥れたこともまた、よく知られている。しかし本書は、執筆者の一

人である本井康博氏の綿密な研究により、あの事件を主として内村と真正面から対立した宣教師アルブレヒトの側からみた記述を提供することにより、二十七歳の内村の無謀というべきか、卑劣というべきか、要するに遺憾千万というべき行動に光をあてている。形勢不利とみた内村は、生徒を巻き込むことによつて反撃にでたのであつたが、最後にはその生徒たちからも見離されてしまったことがわかる。

同志社演説会を思わせる北越学園生たちの演説会、『同志社文学』を思わせる彼らの雑誌『北光』（創刊号には津田仙、大西祝、元良勇次郎などが寄稿）など、この「新潟の同志社」をめざした学校は、その最盛期にはまことに意気盛んなものがあつたのである。

北垣宗治（敬和学園大学長）

藤代泰三著

『キリスト教史Ⅱ 中世』

（嵯峨野書院・一九九一年十月二十日発行）
（A5判・五二五頁）五、九七四円

本書は全五巻の『キリスト教史』の第二巻である。ヨーロッパ中世、キリスト教史、

そして著者は大学神学部で令名が高かった教会史専門家というキーワードからどういうイメージを抱くだろうか。じつは私は第一巻古代編を手にしたとき、これは近付きにくい重い本なのではないかと感じた。しかし目次の「パレスチナの今」を見て驚き、そこから読ませていただいた。第一巻については、すでに竹中正夫先生の名紹介がある（本誌第八七号）のでこれ以上触れない。第二巻にはそういう章はないが「アラブ人が見た十字軍」は「こん日のクウェート問題のひとつの奥の深さを見るような気がする」と結ぶなど、この巻も中世に閉じ込めた専門的なキリスト教史研究書ではない。

構成上のユニークさの第一は今日的関心がモチーフになっていることである。序章で曾野綾子「時の止まった赤ん坊」や身近の若い伝道者の死を語ることから始め、終章では著者御夫妻と寿岳文章の対談で今日の宗教者の生き方を語って結んでいる。本論中にもこのモチーフはいたるところに読みとれる。その第二は中世の人びとの生活を語って西洋史概説書より詳細である。「食

べ物と着る物」「住むところと森」「町に群らがる」「人間形成と学問」あるいは「民衆の信心」にも言及し、一般の社会史では見えにくい教会が封建社会の中で説明されている。ただこれらの叙述が本論の中心課題「思索と信仰」「神とひとつとなる」などの章と統合的に説明されていないように思われる。民衆と神学の乖離なのだろうか。第三は狭く中世キリスト教史にとらわれず、たとえばアリストテレス哲学、慈円の歴史観、良寛の生涯などを介しての理解を試みている。しかしアペラールのついでにエロイズについて言及はなく、著者の意見をうかがいたい気もする。ルネサンスはキリスト教史のなかで意味づけられる。

言うまでもなく、本論は中世キリスト教史である。それを門外の私どもにわかりやすく小項目を立てて整理して叙述されているのであるが、第四の特色はそれぞれ著者の見解を明らかにしていることである。たとえば「わたしの立場」(二三三頁)として項目を立てない場合でも、今日に生きる著者の「人を生かし人に真の幸福を与える宗教」としてのあるべき道を、聖書にたちか

えつつ伝えようとする主張がこめられていることである。「平易な福音と寛容」の章にそれが凝縮しているように思われる。序章にたち帰れば、来るべき世においては、すべての者に「神の愛を受けいれる機会を与えて下さるであろう」という言葉によっていまの私は癒しを覚え、そういう本としても読むことができた。

宮澤正典(女子大学教授)

落合仁司著

『トマス・アクイナスの言語ゲーム』

ーム

(勁草書房・発行一九九一年十月
A6判・二〇四頁 一、九五七円)

ある存在者が何であるか、その何性すなわち本質を決定するには、その存在者の本質が他から区別限定される大いなる場所、この決定に先行する無限の地平、つまりは存在それ自体が前提されねばならない。ところでこの存在それ自体の本質を決定するには、それを改めて他のものと区別し限定する場所としてより大きな存在の前提が必要となる。だがまたその存在の決定には、

さらに大きな存在の前提が要求される——相変らず未決定を繰り延べにして。かくしてことは無限に遡及もしくは後退する、存在それ自体の何であるかはついに決定されえぬままに。結局このように語りえず、ただ与え示されるだけの、存在者の本質を超越した無限にして唯一なる「存在」を、七百年の昔、トマス・アクイナスは神と措定したのであった。

存在者を限定する他者としての神が存在すること、神は無限であり、神以外の存在者を超越しており、神自体が何であるかは知りえないことを、理性が認識すればこそ、理性が信仰の前提となり、かつ信仰は理性を完成するという構図。神の他者としての内在と、それゆえの無限としての超越——トマスのこの存在論的な神理解は、理性の知りうること、知りえぬことを初めて知ったという意味で、以降のヨーロッパの思想的地平を決定した。

著者は、論理的にはほとんど完璧なトマスのこの思考装置を、ヨーロッパ思想の根幹をつらぬく「無限なる他者を必然化する言語ゲーム」の原型的基本チャートとし

て、その銷びた部品を着実に変換することによって、鮮やかなヨーロッパ七百年の思想史の正統の姿を浮かび上らせることに成功した。トマスの命題からアリストテレス自然学の銷を掻き落し、「神」を「人間」に、すべてを対象化する「近代の主体」に（ルネサンス）、また「主権国家」に（マキアヴェリ・シュミット等）、あるいは「近代世界システム」もしくは「自生的秩序」に変換することによって、無限なる外部の解釈学的変質が歴史の趨勢と不可分であることを、精緻なまでに示しえたのである。

無限遡及と自己言及の驚異を秘めた、この「トマスの言語ゲーム」装置に、私はボルヘスの批評と小説、ゲーデルの不完全性定理に感じたのと同じ目眩きと興奮を覚えた。おもうに、これもまた、知の地平の深遠とともにその華やきを告げる書であったのである。

山路龍天（大学文学部教授）

岡林 洋編

『ポスト・モダンとエスニック
—地球にやさしい芸術—への仕掛け』

（勁草書房・発行一九九一年六月
B6判・二八三頁 二、四七二円）

いまとなつて見ればロマン主義こそヨーロッパが独自の成熟をげた一頂点であつたと、前著『廃墟のエコロジ—ポスト・モダンからの見なおし—』（一九八八年、勁草書房）で、岡林洋は大胆に論じてみせた。

ロマン主義は、異教の美の滅びを廃墟に意識し、やはり滅びてしまったカトリック中世にあこがれながらも、プロテスタントふうの新たな聖の創造をくだてた。その創造にさいし、過去の意匠は滅亡から掬いあげられ、ロマン主義のうちに引用される。

このとき、引用された過去はまた、相対化されてもいる。相対化された過去で仮装したロマン主義のヨーロッパは、みずからの個性にめざめるとともに、非ヨーロッパの価値に、エスニック・アート（民族芸術）

の意義に気づく。こうしたロマン主義が現在のポスト・モダンを胚胎した。

この見かたは、一八、一九の兩世紀末に二〇世紀の世紀末を重ね合わせ、それ自体ロマンティックで、ふところが深い。包容力の大きい批評の目をわがものとして岡林洋は、建築をはじめ、さまざまな作品につよい共感を寄せるうち、どうやら現代の「ポスト・モダン」と一括される芸術の事象に、見どころのあるものとなしものを区別しはじめたようだ。その区別を理論的に裏づけようとし、現代芸術に造詣の深い若い人びとをあつめて（おお、全員が二〇世紀も後半の生まれだ）前著同様ふんだんに具体例をあげながら編んだのが、本書である。

ポスト・モダンでは、しばしば「引用」が主張される。人間は理想の実現に向かって進んでいる、という作り話めいた歴史観を捨てれば、過去も未来も、現在によって自由に「引用」される目的のために、乱雑にただそこに在る。ただし、ふたたび作り話の枷に足をとらわれぬよう、その引用はアイロニーをこととしなければならぬ。

それでは足りない、と岡林洋はいう。そ

うしたフランス・アメリカ流ポスト・モダンの「引用」では、しよせん過去の猿まねを出ない。縦に流れる作り話めいた歴史を否定したうえは、横にひろがる差別も取り除いて、地球規模の視野に立った内容を「引用」が含まなければなるまい。ちつぽけなアイデンティティーの拒否。エスニツクへの関心を通してのグローバルな自己同定。それは、ロマン主義の伝統を正統に引き継ぐドイツ流のポスト・モダンが準備するだろう。

その流れを汲む作品は、いま、まちがいはなくあると岡林洋が判定するとき、そのときかれは、今世紀のはじめ、芸術作品に輝きをあたえるオーラの消滅を予告したベンヤミンにたいし、真つ向から、その復活を宣言している。

森 浩一編

『考古学 その見方と解釈』上

(筑摩書房・発行一九九一年六月
B6判・三一四頁 二、九〇〇円)

本書は、近畿地方の研究者によるカルチャーセンターの講座記録をもとにしたもの

であるが、単なる講座内容の書き起こしにおわるものではない。各研究者が筆を加え、あるいはあらたに書き下ろして再編されたものであり、以下の九章から構成されている。

一、考古学—その歴史と目ざすもの

(森浩一)

二、日本の旧石器文化 (松藤和人)

三、縄文文化 (泉拓良)

四、弥生人とその文化 (八賀晋)

五、弥生時代の青銅器とそのマツリ

(寺沢薫)

六、巨大古墳と前方後円墳 (森浩一)

七、埴輪と壁画 (伊達宗泰)

八、騎馬民族説の考古学 (中村潤子)

九、終末期古墳と寺 (前園実知雄)

第一章(考古学—その歴史と目ざすもの)

においては古代の人々が遺跡や遺物とどのようににかかわってきたか、現代の私たちが過去の遺産をどのようにうけとめ認識していくべきかが、編者の遺跡への深い愛着と、確かな歴史観をもって語られている。

以下の章は、時代ごとのテーマに沿ったものである。各研究者間で論の展開に個性

はみられるが、それぞれが最新の研究成果をふまえたうえで総論に加えて、現時点での問題点や課題に言及し、各研究者独自の見方と解釈を披露している。「見方と解釈」は、現在の学会全体として不足ぎみの視点を補うものといえよう。

本書は専門の研究者だけを対象にしたものではなく、考古学の初心者に対しても、親しみやすいように配慮した編集がなされている。それは、図や写真をふんだんに取り入れていることに加えて、本文の下端に空欄を設けて専門用語や主要遺跡、あるいは本文中の難解な用語の解説に充てている点である。これによって読者はページをめぐることなく簡潔な解説に目を転じることができる。

なお、『考古学 その見方と解釈』は上下二巻で完結するが、この春刊行予定の下巻には、以下の内容が収録されている。

住居と集落(石野博信)、考古学と古地理学(日下雅義)、銅鏡の考古学(管谷文則)、天皇陵の考古学(森浩一)、古代都城の考古学(山中章)、須恵器生産の諸問題(山田邦和)、発掘文字の世界(和田萃)、朝鮮考古

学と日本古代文化(東潮)、中国考古学よりみた日本古代(杉本憲司)、中世の考古学―都市の発掘(松下正司)、中・近世の考古学―焼物の生産と流通(鈴木重治) 両巻を通じて、著者一八名のうち、七名が本学の出身者である。

玉城一枝(大学文学部嘱託講師)

森田 章者

『企業内容開示制度——法規制の展開と課題』

(中央経済社・発行一九九一年五月
A5判・三〇一頁 三、五〇〇円)

本書は商法・証券法上の企業内容開示制度を包括的に検討するもので三部に分かれ、巻末には企業内容開示省令と通達が収録されている。

第一部「開示規制の哲学と法的枠組」では、開示規制の意義と法的枠組が解説される。証券投資にどのような利益と危険があるか適切に判断しうる情報を開示して、投資者の合理的な投資判断を可能にする開示主義のもとにおいて、企業は様々な資金調達方法を利用し、投資者も自己責任に基づ

いて多様な投資対象を選ぶことができ、結果として資金の最適配分が効率的になされ、国民経済の健全な発展に資することが期待される。第一部においてこの開示制度の意義と商法・証券法上の開示制度の歴史的發展及び現状が要領良くまとめられている。

第二部「企業内容開示制度」においては、まず、アメリカの証券法と比較して最近の企業内容開示制度の改正(組込方式の導入、参照方式の採用、臨時報告書提出事由の拡大、届出書効力発生期間の短縮、発行登録制度の導入)について解説され、続いて、アメリカ証券法上の経営者報酬及びソフティンフォメーションにかかる開示制度の検討と不実表示の民事責任にかかるアメリカの判例の紹介がなされている。

「開示によるコントロール」と題する第三部においては、昭和五六年商法改正により導入された無償の利益供与の開示と監査制度の解説に続いて、アメリカ証券法上の不正支出開示制度とSECの組織及びその調査権限と活動が概括的に紹介されている。

森田教授は、アメリカおよびイギリスの企業の社会的責任、企業内容開示及び取締役の責任にかかる資料を精力的に集め綿密に検討した上、優れた現実的感覚を基礎に多数の論文を発表されている。資料の緻密な検討と現実的課題に対する個性的で考えさせられる法政策的提言をその論文の基本的特徴としてあげることができる。

本書はそのような既発表の企業内容開示に関連する若干の論文を集め、総論部分を新たに書き加えたものであるが、その平易な文章と相俟って、全体として技術的で複雑な開示制度の基本理論が平明に明らかにされている。とりわけ、開示先進国であるアメリカの状況が客観的に紹介され、アメリカとわが国の間に存在する種々の相違を意識した批判的検討の後、学ぶべき点が明確に指摘されており、本書は企業の健全性確保のための開示にかかる基本理論書であるとともに、有益な啓蒙書ともなっている。本書が法律家だけでなく、企業の健全な発展に関心を有する幅広い人たちに読まれることを期待する。

森本 滋(京都大学法学部教授)

大谷 實著

『精神保健法』

(有斐閣・発行一九九二年九月
A5判・二五二頁 二、四〇〇円)

我が国の精神医療を規制する精神保健法は、宇都宮病院事件を契機として、従来の精神衛生法が昭和六二年に大幅に改正されたものであるが、本書は、その法改正を機として著された体系書である。著者は、我が国の刑事法学の第一人者であるが、医事法にも造詣が深く、すでに、『医療行為と法』や、『いのちの法律学』などの著書は多くの読者を得ているし、また、精神医療に関しても、編著作として、『精神医療と法』や『条解精神保健法』が公刊されている。本書のはしがきによれば、執筆の意図は以下の三点にある。第一は、「精神保健に関する法を体系的に叙述すること」である。法改正以降、大部な注釈書は公刊されているが、体系書としては、本書が初めてであり、その意義は大きいものがある。第二は、「精神保健法の内容を、できるだけ客観的に明らかにすること」である。そして、重要な問題に関しては、とくにスペ

ースを割いて詳細な検討が加えられているのも本書の特徴であろう。例としては、精神障害者は、自らの利益となる医療を選択できないことがあるから、精神医療は強制医療の側面を有することになるが、精神障害者に強制的に治療を施す根拠について、危険な精神障害者から社会を守るためではなく、患者の医療・保護を中心に据える立場が基本的に妥当だとされている箇所などが挙げられよう。それ以外にも、保護義務者や精神医療審査会などに関しては、とくに詳しく論じられている。第三は、一般の市民にも分かるように、平易な叙述に留意されたことである。確かに、現代社会においては、テクノストレスに代表されるように、誰もが精神的危機を迎える可能性をもっているのだから、精神医療と法に関する知識が必要とされる場合は今後増加することが予想される。そこで、本書では、序章に、法律に関する基礎知識の項を設けるとともに、クロスレファレンス(本書中の参照箇所の指示)が随所に施されている。さらに、巻末に資料を掲載して読者の便宜が図られている。

以上のような意図に基づいて、本書では、精神保健法の基礎、精神保健の施設と組織、精神障害者の医療および保護、通院医療、精神病院における医療・保護、入院患者の人権保護、地域社会内医療・保護と社会復帰という項目が取り上げられている。そして最後に、精神保健法に関連する諸問題として、麻薬中毒やアルコール依存症、老人の精神障害、処遇困難者問題、医療過誤、精神障害者の他害事件とその法的責任などが論じられ、さらに、付章で精神保健法の今後の課題が指摘されているのも有用であろう。

本書は、このように、法律にあまりなじみのない一般市民や医師の方々が精神保健法についての知識を得るのに最適の書物になっているが、また、法律家にとっても多くの示唆を与えるものである。この問題に関心のある方には必読の文献であり、我が国の医事法学にまた新たな業績を付け加えられた意義は大きいと思われる。

川本哲郎(京都学園大学専任講師)

青木康容・中道 實編

『現代日本政治の社会学』

(昭和堂・発行一九九一年七月
A5判・三五七頁 三、六〇〇円)

本書は、中久郎教授を中心に組織された「パワースタート研究会」のメンバーが中心になって、現代日本政治を解説したものである。編者の青木・中道両氏によれば、従来の日本の政治社会学は、投票行動・政治的社会化・政治意識・政治文化など、政治の周辺領域では大いに成果をあげてきたが、政治の中心的な分野である権力や支配・官僚制などの領域においては学説研究・理論研究の域を出ていないことが多い。この政治の中心領域において社会学的な現状分析を試みようとしたものが本書である。

本書は以下の各章から構成されている。第一章「政治」の社会学（青木康容氏）、第二章「戦後政治のあゆみと政治過程の変化」（中道實氏・原田隆司氏）、第三章「議会と政党」（原田隆司氏）、第四章「行政官僚制と政治」（中道實氏）、第五章「ビジネスと政治」（青木康容氏）、第六章「戦後日本の野党」（中嶋昌彌氏）、第七章「労働組合の政策参加」とそ

の基盤」（小川賢治氏）、第八章「中央―地方関係論再考」（田中滋氏）、第九章「政治と社会運動」（牟田和恵氏）、一〇章「高度大衆社会状況と政治」（田村雅夫氏）、十一章「政治社会の安定と変動」（青木康容氏）。本書は基本的にはデキストをめざしたものであるが、それにとどまらず八章のように新たな視点から現代日本政治を分析する説得的な論考もみられる。

構成からもわかるように、本書は社会学者が政治の中心的な問題に果敢に挑戦したものである。しかし、そこで展開される議論の多くは、政治学と社会学の際だった視点の相違を感じさせるものではない。このことは、社会学の独自性を強調する立場からすると好ましくないことかもしれない。しかし、評者にはむしろ好ましい事態のようにも思える。現代社会の複雑な問題をとらえるためには、社会学・政治学・経済学といった区分をあまりに明確にすることは、むしろ有害であると考えからである。社会学には制度、特に具体的な法制度などのフォーマルで定型的な制度をあま里重視しない傾向があると評者は考えるが、

その点、政治社会学は、政治学や行政学とも手を結び、文化や意識とともにフォーマル・インフォーマルな制度を総合的に考察する必要があるのではなからうか。その意味で、本書はこれからの政治社会学のひとつの方向性を示すものといえよう。

小林久高（島根大学法文学部講師）

中尾武雄著

『寡占と経済厚生』

(有斐閣・発行一九九一年七月
A5判・二六六頁 三、七九〇円)

本書の研究対象とする専門領域は、応用ミクロ経済学の一分野、産業組織論である。そこでは、従来、構造―行動―成果という関連から市場の経済的評価を下すという手法が一般的であった。しかし、現実の観察結果の解釈をめぐる研究者の間の食い違いが激しく、久しく論争の絶える間がなかった。

ここ数十年、産業組織論は大きな転換期にさしかかりつつあり、革命的とも一部で称されるほどの新しい展望が開けてきた。ミクロ経済理論の一分野とはいえ、理論基盤の乏しさが従来の混迷を招いたとする認

識がこの変革の出発点である。そこで、理論モデルの一層の精緻化が進められ、企業行動理論の再検討が着々と成果を挙げつつある。「戦略的行動理論」、「コンテスタブル・マーケット理論」などはその一例である。本書の展開もこの新しい動きと軌を一にしており、寡占企業行動の理論的検討に最重点がおかれている。

過去十数年、著者が欧米の雑誌に発表した研究成果が集成され、一昨年、学位請求論文として本大学に提出された。この学位請求論文に基礎をおくという事実が物語るとおり、本書の学術的価値は測り知れないほど大きく、産業組織論の行方を左右する可能性をもつものである。観察結果から原因に遡るという旧来の手法ではなく、厳密な数学的展開をもとに現実には迫るという手法が、本書を構成する各章に共通した著者の基本姿勢である。

少数の企業が市場の大部分を支配する寡占体制は、我が国をはじめ欧米諸国にも共通してみられる現象である。本書は七部、十四章と序文から構成され、寡占が経済厚生に及ぼす影響について、それぞれ、産業

成長と利潤率（第一部）、市場構造と成果（第二部）、RD（第三部）、賃金（第四部）、国際競争圧力（第五部）、不確実性（第六部）、経済成長（第七部）に重点をおいて検討を加えている。本書の内容が、寡占にまつわる問題のすべてを網羅しているわけではないが、この領域で注目すべき要点は、すべて押さえられている。しかも、従来は顧みられることのなかった反独占政策と資本蓄積という側面も取り上げられ、画期的な視点で提示されている。

本書の水準は高度であり、経済学のバックグラウンドをもたない読者にとっては難解かもしれない。このことを意識してか著者は、各章に「はじめに」「および」「結語」を挿入し、関心ある読者の理解誘導を図る工夫もこらしている。寡占問題に関心のある学生、研究者、実務家にとって、本書は必読の書である。

杉江雅彦編
『アジアNIEsの金融・証券市場』

八田英二（大学経済学部教授）

（晃洋書房・発行一九九一年七月）
A5判・二四三頁 二、九〇〇円
本書は、大学院商学研究科で編者の指導を受けた証券論ゼミ生が分担執筆したもので、現時点で入手できる最もレベルの高いフィールドワークの成果である。

本書の構成は、序章アジアNIEsの発展と金融・証券市場（杉江雅彦）、第一章韓国の金融・証券市場（金 鎮九・宋 智永）、第二章台湾の金融・証券市場（姜 性翼）、第三章シンガポールの金融・証券市場（伊東眞一）、第四章香港の金融・証券市場（中泉康人）となっているが、母国市場をサーベイできたのは第一章の執筆者のみで、他は外国市場の調査研究であった。その上、アジアNIEsの金融・証券市場に関するデータは各国とも乏しいものであるから、担当者が成果を纏めるのには相当の努力と情熱を傾注している。

今日、わが国のアジアNIEs金融・証券市場に対する関心は、かつてない程に高まっており、同市場を対象とした論文・著作が相次いで発表されているが、その多くは実情紹介の域を脱していない。本書は、編

者の提起した研究視点ⅡアジアNIEsの驚異的な経済成長に、各国の金融・証券市場は一定の貢献をなしたかⅡを担当者が十分に把握し、現地での綿密な調査と文献資料収集の成果を論旨に反映させ、体系のある研究書になっている。

アジアNIEsとして本書に取り上げられた四力国の金融・証券市場の発達程度は全く異なっている。韓国と台湾の金融経済は、成長著しい実物経済とインバランスな状態で、私金融市場のような非近代的な残滓が少なくないことが明らかにされる。香港、シンガポールは、所謂都市国家型経済という特徴を持っており、しかも外国民間資本を積極的に受入れるための自由化政策を早くから採用する等国際金融市場に特化した展開を遂げている。

各章では、これらの特徴が各国の経済動向と対比させながら、統計の裏付けを以て詳述されているので、アジアNIEsの現状と将来に関心を持って深く研究しようとする人達には、本書は必読書であると言える。なお、編者が商学部長の激職にありながら本書の上梓に努力されたのは、愛弟子

に真理探求の厳しさを示すとともに、深い愛情を抱いておられたからであろうと感じられる。

神木良三（大学商学部嘱託講師）

久山喜久雄編

『フイールドガイド

大文字山』

（ナカニシヤ出版・発行一九九一年八月）
（四六判・一七四頁 一、八〇〇円）

京都ほど身近に里山に親しみ、その中に入って楽しむことのできる大都会は、日本には他になかろう。私は高等学校（旧制）の生活を東京で送ったが、京都の大学に来て自然がこんなに身近にあるのに感激した。もともと自然に生きる生物の研究をしたかった私にとっては、幸福この上もないことを感謝していた。

一九四二年以来銀閣寺付近の疏水畔、「哲学の小径」に沿って居をかまえるようになって、一しおこの感を深くしていった。氏神さんが銀閣寺横の八神社でその前を通って大文字山に何回登ったことか。初夏の若葉の中でさええずる小鳥の声や姿、秋の赤や

黄にあやなす紅葉、頂上からながめた平安の都の街のありさま、すべて心に焼きついて離れない。また付近の疏水畔の法念院から銀閣寺一带は、古都の歴史と自然とが見事に調和し、しばしばそぞろ歩いて無心の感慨にふけた。市街地から僅か数分あるいは数十分歩いただけでひたることのできるこのすばらしい自然の恵みは、京都ならではの味わえない幸福であると思った。

この何ものにも代えがたい京都の幸の親切な案内が、一冊の本となつて出版された。それが今紹介しようと思つている本である。そもそもこの本の生まれたもとは、「森の教室」という、大文字山を中心とした法念院周辺の自然を多角的にとらえる観察の会に発している。この会は、法然院貫主の梶田眞章師の発念により、同志社大学の久山喜久雄さん等を中心として運営されている集りで、一九八五年に発足したと聞いた。そこでは自然一般や大文字山の自然に関するやさしい講演の会や、時に野外に出での自然観察などを、適当な指導者のもとで行ない、興味ある人は大人でも子供でも、誰でも参加できるならわしになっているという。

この森の教室の活動を縦軸とし、大文字山の自然を横軸として織りなした生まれたのがこの本である。内容は三部に分かれ、第一部では、「自然と私たち」として数人の著者が自然と人とのかわりや、特に東山一帯の自然を材料として一般的に語っている。第二部では、「フィールドガイド大文字山」として、その自然、植物、動物、地質鉱物などについて、その道の専門家が、具体的に詳しく、しかもやさしく説明している。誠に適切な京都の里山の解説である。

この部は最も多くの頁を使い、全体の約五〇%をしめる。最後の第三部は「大文字山に想う」として、梶田真章貫主や福井謙一氏など有識者が、それぞれの「大文字山への思い」を語っている。他に大文字山散策路などの概略図が示されているのも、大文字山の自然に親しもうとする人たちにとって大変便利である。

京都の一大特色である自然の中へ、大人も子供も容易に近づくことのできる案内書として、さらに里山一般のやさしい解説書として、広く推薦したい本である。

森 主一（京都大学名誉教授）

斎藤文彦著

『アメリカ留学のすすめ——自由な心を求めて——』

（明石書店・発行一九九一年十一月）
（四六判・二三〇頁 一、六〇〇円）

著者の斎藤文彦君は同志社大学法学部の出身で現在アフリカのウガンダ共和国の首都カンパラで国際連合開発計画の職員として活躍している国際公務員である。

同志社大学に入学の当初留学は勿論、国連の職員としてアフリカの地で働くことは夢にも思っていなかった著者が大学に入学後、どのようにして留学を決意するに至ったか、アマースト・カレッジでどのような教育を受け、さらにイエール大学大学院にて国際関係学を学び、なぜ国連の職員として発展途上国のウガンダ共和国に赴任するにいたったか、という自己のアメリカ留学中の学生生活の体験記である。

紙幅の関係で、著者の執筆意図を十分に伝えることは困難であるが、著者はアマースト・カレッジの学生として二年間の在学中にアメリカの大学の本质、いやむしろ人

間教育としての大学教育のあり方を体験したということである。日本での大学生生活を体験していた著者はアマースト・カレッジでの学生生活と日本でのそれとを十分に比較することができた。各学期ごとに十分に準備された授業計画、授業中における討論とそこで展開される多様な意見と論理、論理的思考と表現力を求める多くの宿題、このような教育の中からはじめて自由な心が生れると著者は考えているのである。授業は学生生活の重要な部分であるが、アメリカ人の学生と寮で生活を共にし、友人をつくることもアメリカ留学生生活の大切な部分であることを強調している。

イエール大学の大学院における学生生活も基本的にはアマースト・カレッジ時代と大きな変化はないが、学部時代の苦難な生活に耐えアメリカの学生生活を体験した「留学生」組と、新しく日本の企業や官庁から派遣されてくる「研修生」との間に生じたきしみが指摘されている。わたくしはこの書物は学生ばかりでなく大学の教職員にも是非読んでいただくことを希望する。

浅香 正（大学文学部教授）